

---

# リスニング

タ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リストニング

### 【著者名】

【Zマーク】

Z5857Z

### 【あらすじ】

酒屋で出会った二人。

夕

歌を聞け。私の歌。私の思い。

エンディリカは考へてゐる。同じ職業なのに、どうしてこうも待遇が違うのか。友達のミーシスは顔とその美しい歌声で店の看板娘となつたのに、私はまだ歌わせてもらつていない。歌い手として働いているのだから、歌わないお金ももらえないのに。お金がないと身なりを良くできない。欲しいものはたくさんある。赤色の靴、ちょっとだけ露出の多いドレスに金と銀の腕輪。どれも全部ミーシスは持つてゐる。……私は、このビール一杯のお金さえも払えないのに。

自分が嫌になつて酒屋に来たのは良かつたけど、こここのビールがこんなにも高いとは知らなかつた。注文してから気付いたのだ。私の今持つてゐる全財産をはたいても、ビールの値段にはぜんぜん足りないことに。すぐに帰ろうと思つたけど、その時にはすでにビールが運ばれていた。嫌な店だ、貧乏人は来てはいけない店だ。

じつと、目の前のビールを見つめる。泡がなくなつてきていた。飲まないといけないけど……お金もないのに、どうやって払えばいいのか。

周りを見ると、自分よりもずっと良い服を着ている人ばかりだつた。手入れのされた髪、皺のないネクタイばかり。自分の知つてゐるネクタイは、もつとくたびれた そう、あんな感じのだ。前の方のテーブルに、男が一人飲んでいた。着ている服は上等なのに、きちんとアイロンをかけていないのか皺ばかり。私でさえもつと、

小奇麗に見える服を着ているのに。おかしくなつてちょっとと笑うと、男が気付いてこちらを見た。失礼だつたかな、と後悔して、そつと下を向いた。

「おひとりですか」思いがけず、男は声をかけてきた。

「ええ、まあ」つれなく返事をする。店の姉さんたちが言つていた。酒屋で声をかけてくるのは悪い男で、信用してはいけないと。

笑つたのは失礼だつたかもしれないけど、これ以上関わりあいにならないほうがいい。謝つて、このビールをなんとかして、帰ろう。

「すいません」

「え？」私はまだ、謝つてない。びっくりして、思わず顔をあげた。男は優しそうな顔をしている。本当にこんな人が悪い人なの？

「一緒に飲んでもらつてもよいですか、連れがまだ来ないです。お互い一人では寂しいでしょう」

心の底から申し訳なさそうな顔をしている男性に、エンティリカは知らず知らずのうちに「はい」と答えていた。

男はほつとしたのか優しく笑つて、前のテーブルからお酒と魚の料理を持つてこちらのテーブルに移る。

……連れて、女人の人よね？ 恋人？ なら、私が襲われることはないよね。うん、悪い人じやなさそうだし。

店の客はたいてい男と女の二人きりでくる。それを思い出しても、エンティリカは安心した。一人きりなのも心細かつたので、彼の提案は良いことだと思った。

「名前はなんというんですか」男が尋ねてきたので、少しだけ考えて答える。

「ミーシスです。あなたは？」

嘘をついたことが少しだけ後ろめたく感じたが、どうせ今だけの

話し相手だ。開き直って、彼を見た。本当に優しそうで、整った顔だ。店の役者にだって、こんな人はいない。

「レイモンド。レイと呼んでください。……そうですね、俺は城の門番をしています。あなたの職業は？」

話題を探してくれたのか、少しだけ彼は考えた様子で言った。しかしその選択は失敗だ。聞いて欲しくないことだった。それに城の門番なんて、反応しにくい。すごいとか分からぬし。偉いのか偉くないのか、教えてほしいぐらいだった。

「近くのお店で歌い手をしています。全然売れないんですけど」それどころか歌つてもいないが。ミーシスという名前はそう珍しくない、ばれはしないだろうと思つてそう言つ。

「ああ、俺が今日行つた店にも、ミーシスという歌い手がいましたね。素晴らしい声でした。花のような雰囲気の女性で」

本当に今日は運が悪い。店の客に会つて、私は、名前も騙つてしまつている。本当の名を言えば良かつた。エンドイリカなんて、有名でも何でもない名前を。

ミーシスはよく花に例えられている。柔らかい金髪とほつそりした手足が、まるで花の妖精のようだとか。私のぱつとしない茶髪や、鳥の足みたいに細すぎる手足とは大違いだ。ろくに手入れもできていらない髪を撫でながら、エンドイリカはそつと溜息をついた。

「そのビールは飲まないんですか？　おいしいですよ、ここのお酒は」

この人は、私の触れて欲しくない話題ばかり選ぶ。これ以上嘘をつくと自分にとつてさらにも悪い状況になりそなので、諦めて正直に言った。

「お金、払えないんです。払えないことに気付かなくて」

自分が本当に嫌になる。情けないことばかり、私はしている。馬鹿にされたらううなと思って男を見ると、彼は驚いていたがそれ以外の感情は持っていないようだった。

「では俺がおーります。合い席してもらつたお礼ですから、どうぞ飲んでください」

なんて良い人だ。エンティリカは真っ先にそう思つてしまつたが、やはりダメだと思つて首を横に振る。

「いいです、店員さんに事情を話して帰りますから」

「そんな、では俺が一人になつてしまします」

立ち上がる私に、傷ついたようにレイは言つた。困つてしまつて、また席に着く。

「お願いです、俺のためにも飲んでください」

そんな風に言われてしまえば、断る気にもなれなかつた。嘘もついたんだから、図々しくにもなれるわ。

「本当にいいの？」一応確認すると「もちろん」と完璧な微笑で答えられた。

じいつと、ビールを見つめる。あんまりおいしくなさそうな色だ。レイのお酒の方がよっぽどきれいな色をしてい。匂いもあんまり、好きじゃない。

「ありがとう」そう言つて、一口だけ飲んだ。……まずい。口の中が一気に臭くなつたように感じた。

姉さんたちはみんなこんなまづくて吐き氣がするものを飲んでいたの？

「おいしいわ」泣きそうになりながらも、そう感想を言った。お金も払つてもううのに、まずいなんて失礼だ。

「本当？」良かつた安心したような顔でレイはお酒を飲んだ。私もまたビールを飲む。

「リースさん、何か注文しますか？　ああ、遠慮しなくていいですよ」

少しだけ考えて、「いりません」と答える。早くこの酒屋から出ていきたい。アルコールの臭いがつらかった。

「じゃあ俺も。……歌い手ってどこの店で？　今度行きます」

「小さなお店だから、見つけるのも難しいと思います」

嘘を重ねる。あなたが今日行ったお店よ、とは言えなかつた。

「俺はものによくなくすから、探すのはうまいんですよ」「冗談みたいに言うので、Hンディリカは少しだけ笑つてしまつ」

「探さないでください、恥ずかしいから」

歌い手なのに、店では密室の掃除ばかりしている情けない女だ。嫌な気持ちを消したくて、ビールをもう一度飲む。やつぱりますい。でも、少しだけ気分はすつきりした。

もうビールはコップの半分ほどになつてしまつた。なんとなく、体の中が温かくなつたような気がする。

「連れつてどんな人なんですか？」興味本位で聞いてみた。たぶんきっと、この優しそうな人の恋人なんだから、同じくらい優しそうでかわいらしいひとなんだろう。

そう想像して彼の反応を見ると、レイは困つたように笑つていた。「そうですね……難しいな、考えしたことなかつたから。ヴィーは、うーん、言葉は乱暴だけど優しいんです。仲間思いで良い奴ですよ」やつぱり優しいんだ。言葉が乱暴つていうのが少し気になるけど。ヴィーは愛称かな。ヴィクトリア、ヴィヴィアンとか。華やかで美しい名前だ。

「ヴィーさんは、何の歌が好きなんですか？　歌えるかもしれないわ。お礼に歌を歌うから」

ビールの代金にはおよばないが、せめてものお返しだ。しかしレイはさらに困つたような顔になる。

すぐには思いつかないかなと思つて、適当に有名な歌を挙げていく。

「春の女神への祈り、感謝祭の歌、金の蜂。ええと、実はナンキータの女海賊とか？」

金持ちの好まない、勇ましい女海賊の歌だ。エンディリカにひとつは、うきうきとした気分になるお気に入り。サビの部分だけを歌つてみせると、レイは驚いたように「お上手ですね」と言つてくれた。

「ううん、あまり歌を聞かないから分からないな。でも、ヴィーは馬が好きなんです。いつも遠出していて、今日も一ヶ月ぶりに会つんですよ。そうだ、馬の名前をつけてあげてください。新しく生まれたらしいんですけど、良い名が思いつかなくて困つているようだから」

馬が好きなの？ あまり想像ができなかつたが、彼女のこと話をすレイはとても楽しそうなので、やはり愛しているんだなあと感じられた。

「分かりました。あんまり、自信ないですけど」

彼がお酒を飲むので、エンディリカもつられてビールを飲む。慣れてきたようで、あまりまずいとは思わなくなってきた。

なんだか頬が熱い。田の前のレイが、少しだけ揺れているようこ見える。

「ミーシスさんの友人はどんな人なんですか？」

聞かれて、すぐに花の妖精が頭に浮かぶ。

「私と同じ店で、歌い手をしているんです。彼女はヴィーさんよりも優しいと思うわ、きっと」

想像でしかないのに、自然とそんな言葉が出てくる。

「歌もうまくて、美しくて、いろんな人から愛されている  
優しいミーシス。何のとりえもない、客の前で歌つたこともない  
私を、親友だつて言ってくれる彼女。

「私はいつも、ミーシスに憧れてる」  
ぱつりとエンドイリカは言った。おかしい、頭の中がぐるぐるしてゐる。

レイを見ると、彼は不思議そうな顔をしていた。なぜ？　おかしいことなんて、言つていないので。

「ミーシスはあなたでしょ？」

「いいえ、ミーシスはもつと美しいのよ。コーネリアで一番の歌い手、私の自慢なの」

本当にレイはおかしいことを言つ。私をミーシスと間違えるなんて。

レイが少し考えて言つ。

「あなたも十分美しいですよ」

本当に優しい人だ。おせじなんて、言わなくともいいのに。  
首を横に振る。

「本当は、この店に来たのだって彼女がおすすめだつて言つからなの。お客様につれてきてもらつたんだつて、……私には似合わない場所だったけど。でも、どうしても来てみたかった。ミーシスばかり人気者で、私は……」

私は、誰の目にもとまらない地味な女だ。  
人気者のミーシスが大嫌いな、性格の悪い女。  
ううん、好きなの。大好きなのに。

「グラップを手に取る。まだ半分ほど残っているビールを、一気に口

の中へ入れた。

なぜかレイが慌てたように立ち上がる。ヴィーさんが来たの？ エンディリカは自分も席をたとうとしたが、足に力が入らず出来なかつた。眠くなってしまつて、テーブルに突つ伏してしまつ。

「大丈夫ですか？ ああ、起きてください。家はどこです？」  
そんなことを聞いてどうするの？ 本当は悪い人だつた？  
レイが肩をゆするので、気持ち悪くなつてきた。やめて、と言おうとしたが、言えたのか分からない。

彼が途方に暮れた顔をしている。理由を聞いてみようと思つたが、眠くじょうがない。そつと目を閉じる。

「ビール、初めてだつたんですか？」

私がそれに答えたかどうかは分からなかつた。ただ、大好きな歌が頭の中に響いている。ミーシスと一人で歌つた歌。忘れかけていた歌だ。

\*

「よお、久しぶりだなレイモンド」黒髪の男が、酒屋に入つてくる。レイモンドは安心して、立ち上がつた。

「ヴィー、会えて嬉しいよ。無事でよかつた」

「それで呼ぶのはよせ。子供みたいで気持ち悪い」

手招いて、ヴィーを空いた席に座らせる。彼は隣の少女に気がついて、眉をひそめた。

「お前まさか、こんな小さい子を引っ掛けたのか？」

「そんな訳ないだろ、ヴィー……ワインセント」彼がじりりと睨む

ので、仕方なく本名で呼んだ。いくら女の子に間違われるからといって、そんなに気にしなくてもいいと思うけど。

「お互い一人だつたから、一緒に飲んでもらってたんだ」「それだけでこんなになるか？」

言われて、ため息をつきながら少女を見た。茶色い髪の、今は見えないが神秘的な緑色の瞳を持つ女の子だ。そう、こんな風にしてしまつつもりはなかつた。

「ビール初めてだつたみたいで……酔つて眠つちゃつたんだ」

ヴィーは驚いたのか目を大きく開けた。俺も驚いたよ、と言葉を続ける。

コップ一杯くらいで酔うとは思わなかつたし、酒が初めてだとも思わなかつた。でも今彼女を見てみれば、まだ幼く見える。

もう少し俺は気を配るべきだつた、とレイモンドは後悔していたのだ。

「名前は？ 家とかそんなん、知つているのか？」

少し悩んで、レイモンドは頷いた。「名前は知らないけど、働いている場所は知つてる」

「名前も知らないのか……」呆れたようにヴィーが言つので、俺も自分が情けないよと思つた。

一応は聞いたけど、たぶんアレは違うんだろう。少女をまた見つめてから、連れに謝る。

「ごめん、俺ちょっとこの子を店まで送るよ。心配なんだ。その魚、食べていいから

「ああ、まあ待たせたのは俺だしな」

当然のように魚料理に箸をつける友人に礼を言つて、少女を抱き上げる。「どんな子なんだ」ヴィーが興味本位で聞いてくる。「秘密だよ」素直で正直者だなんて、女たらしの友人に言えるわけがない。そして、酒屋をしてコーネリアの店へと急いだ。今日行つたばかりだから、店の場所も覚えている。

明日もきっと、この少女の店へ行こう。約束した、馬の名前を聞  
るために。

そしてもう一度名前を教えてもらひつのだ。ミーシスではなく、彼  
女に似合ひ、小鳥のような可愛らしい名前を。  
レイモンドはいつになく、楽しい気持ちになっていた。

腕の中の少女が眠る直前に歌っていた歌を、もう一度聞きたいと  
思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5857z/>

---

リスニング

2011年12月19日18時54分発行